
かけまちがえたとき

一天草莽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かけまちがえたとき

【Nコード】

N8028T

【作者名】

一天草莽

【あらすじ】

とある高校生の、携帯にまつわる話？

(前書き)

とりあえず書いてみましたが、なんか自分でもよくわからなくなっ
てしまいました。

さて、今は何時だろう？

おそらく普段から時計を頼りにしてしまつから、わざわざ時計を確認しなければ自分の中で現在時刻を実感することもできなくなつてしまうのだと、半ば自嘲的にあきれ返りながら、それでもやっぱり時計を見上げてしまうのだからやりきれない。

気分的にはそろそろ夕刻だろうと思いつつ確認してみると、秒針のない柱時計が大まかに指し示している時間は、どつりで四時ぴつたりだった。自分の体内時計もそう狂つてはいないのだと安心しつつ、こうして予想が付くぐらいなら時計など確認する必要もなかったのだとちよつぴり悔やむ。

それにしても、結局四時まで寝ちまつたのか。

そう考えると、なんとなく悔しさがこみ上げてきてしまう。けれど、それを家の中で暴れまわつて処理するわけにもいかないだろう。そこで僕は、普段からよく利用している公園に出かけることにした。綺麗な湖で有名な公園である。

家から歩いて数十分、やつとの思いで公園にたどり着く。それからしばらく池のほとりをのんびり歩いていると、同じく一人で散歩をしていた友人のジョンに出会った。

ジョンといつても、彼は外人ではなく日本人である。たいした理由など何も無いが、僕たちは友人間のあだ名として、お互いに外人の名前を付け合っていたのだ。

「おーい！」

ジョンは僕の姿を見つけるとすぐ、大きく手を振りながら駆け寄ってくる。僕も彼と出会えてそこそこうれしかったものだから、同じような反応を返した。

それから僕たちは無駄話を続けていたのだが、その会話の途中で、

彼は突然僕にこんな質問をしてきた。

「ところでさ、お前は携帯電話持ってる？」

この一見何気ない質問に対して、しかし僕はなんと答えるべきか決めかねた。

現実には僕もすでに父から携帯電話を持たされていたし、ジョンのことは番号を交換し合うような親友だとも思っていたけれど、何よりも電話そのものが苦手だったからだ。

実際、僕は携帯のことを嫌っていて、ほとんど持ち歩くことさえしないほどのだから。そこでしかたなく、僕は彼に携帯など持っていないと嘘をついてしまう。

「なんだ、そうなのか。でもさ、お前以外はみんな持っているんだぜ？」

「まあ、それは確かに悲しいことではあるね。だけどさ、こうして偶然出会ったときに、ちゃんと話しかけてくれる友人がいるから幸せだよ」

「本当か？」

「携帯は確かに幸せの一部だけど、友情を保つための道具にすぎないんだ。それから……」

「へいへい、お前が言いたいことはよくわかったよ、わかった」
どうやらジョンは僕の言い訳にあきれてしまったようで、黙れと言わんばかりに右手を大げさに振っていた。なんとか携帯の件をごまかせたのだと内心僕は喜びもしたが、やはり嘘をついたことに対する申し訳なさも感じずにはいられない。

けれどそれからしばらくすると、僕たちは何事もなかったかのようになられてしまう。

公園を出るとすぐに夜の帳は下りて、段々と暗くなっていく帰り道。僕は自分のこれからのことを考えながら家路を急いだ。

「来年、自分が高校三年生になったとき、一体どんな進路を進もうとするのだろうか？」

まるでこの闇夜のように暗く、三寸どころか一寸先も見ることが

できない未来には、本当に明るくなるときがあるのだろうか。

「Life goes on. 最近知った言葉。悲しいことがあつても人生は続く」

本当は僕に親友なんていないんじゃないだろうか。そんなことをよく考える。

「携帯、本当は持っているんだけど。ねえ、そんなこと言えないなあ……」

帰宅途中だと思われる人たちの中を、僕はぶつぶつと独り言を呟きながら歩いていく。

「ジョンには悪いけど、いつそ携帯は解約しよう。どうせ使わないんだから」

僕が大きな声でそう決意したとき、ある人物が僕のもとへ駆け寄つてきてこう言った。

「なんだって？」
それは、まぎれもなくジョンだった。

二

僕が自分の携帯電話を所有していることがジョンに知られてしまうと、その翌日から僕は思いつく限りの友人を含めた知人に、携帯の電話番号を教えまわるように強制されてしまうのだった。

それはなぜか、今までに経験したことのない不思議で奇妙な行為に思えてならなかった。番号を人に教えまわることは、恥ずかしさや嬉しさともどこか違う、何かしらの決意表明をして回つたような気がしてならなかったのだ。

「これでお前も立派な仲間じゃないか」

一通り番号交換を終えた僕にジョンは言う。けれど、
「今までは？」

そんな疑問が当然生じてしまう。そんな僕の当たり前な疑問に、おそらく意表をつかれたらしいジョンは適当に返事をするのだ。

「……まあ、今まで以上の仲間ってことさ。それより、ちゃんと携

帯使えよな」

「……ああ」

しかしながら、僕はジョン以上に適当な返事をしてしまっていた。

そうして思いつく限りの知人に自分の携帯番号を教え終わった数日後、僕は意気揚々と学校へ向かうのではなくて、安堵と不安で家にこもることになった。

とはいえ、さぼりではなく、単なる休日である。

その休日の間はもちろんのことながら、いつものように携帯の電源を切っていた。僕は自宅にある固定電話の番号なんて誰にも教えていなかったのも、家にかかってくる電話は僕の両親に対してだけであった。そうして僕は外部との接触を完全に絶ち、少し長い連休を一人きりで過ごしたのだった。

ところがその連休が明けると、朝から僕は高校に行くことを少しためらった。

それはよくあるような連休明けの気だるさだけではなく、いつも以上に僕を学校から遠ざけてしまう不思議な何かがあったのだ。そんな今まで感じたことのない一種の罪悪感を抱きながら、僕は両親と時間にせかされてしぶしぶ登校した。

すると、当然ながら知人たちから僕は非難を受けることになったのである。

「なぜ携帯の電源を切っていたんだ」

要約すれば、非難の内容はこれに尽きる。これまで携帯など使ったことのない僕でも、このことの薄情さには気づかされた。それで、「ごめん」

と、何度も繰り返し謝ったのであった。

三

しかし僕はその後も電話にはなかなか出なかった。それはなぜかわからないけれど、どうしても出る気になれなかったのだ。

ジョンは僕に、きつとそれは着信音のせいだろうと言って、それまで初期設定されていた妙な音楽から、いかにも電話だといわんばかりの伝統的な「プルルル」と、何度もしつこく鳴り響く着信音に変えさせた。

それでも僕は、かたくなに携帯を使わなかった。あきらめることなく何度も僕に注意する人もいれば、そんな僕にとつとあきれ返ってしまう人もいた。残念なことに僕は、その両者ともが悲しくて仕方がなかった。

そんなある日、ジョンが僕にこう言った。

「お前が意地でも使わないのなら、俺は意地でも使わせてやるぞ」
自分のことくらいならよく知っている僕は、彼がどうやってそれもそれは無理だと思った。だから素直にこう言い返してしまう。

「そんなの無駄だよ。そもそも僕には使う気がまるでないんだから」
「無駄？ それはどうか。お前が携帯を使わざるを得ない状況にしてやるぜ」

「携帯を使わざるを得ない状況って、一体どんな？」

しかしジョンは僕の言葉を無視してどこかへと立ち去ってしまう。僕は呼び止めるべきか少しの間考えたけれど、なんだかそれもあききたりだと思つてやめてしまった。

その翌日、ジョンとその友人であるマークが、二人そろって僕のもとへやって来た。

「マーク、こいつにあれを見せてやれよ」

「オツケー。まかせな」

僕の前に差し出されたマークの手には、こんな手紙があった。

『もしあなたが悩んでいたら、私に電話してください。』

もしあなたが不安な状況にあるのなら、私に電話してください。

もしあなたに楽しい思い出があるなら、私にその話を聞かせてください。

もしあなたの友人が苦しんでいたら、私に電話するように言って

ください。

どんなときも、あなたは一人ではありません。必ず私がついていきます。

うれしいときも、悲しいときも、私は一人一人の幸せのために何かをしたい。

だから、電話をしてください。必ず何か答えます。

TEL XXXX-XXXXXX-XXXXXX

幸せを願う者より』

「なんだい、これ？ 僕の電話番号が書いてあるのだけど……」

「手紙だよ。これを何枚もコピーして、いろんな場所に配りまくるからな」

このマークの言葉が、僕には本気なのか冗談なのか、全くわからなかった。

けれど、もし彼らの言動が本気のもりなら、何かとんでもないことが起こるかもしれない、僕は恐れながらも冷静に想像してしまふのだった。

それにしても、いくら彼らが意地になったとはいえ、ひどい個人情報公開もあったものである。

四

それから二週間は、何事もなくあつという間に過ぎ去った。

僕はいつからか携帯で音楽を聴く習慣になつていたので、昔のように携帯の電源を切ったままでいるということとはなくなっていた。

このときの僕は、きつと例の手紙を配るなんていう行為は、結局ジョンとマークが僕を脅かしたかっただけなのだと思つてすっかり油断していた。

ところが、突然手元の携帯電話が鳴り出したのである。

危つく心臓が飛び出しそうになつたくらい驚いたけれど、それでもどうにか落ち着いて携帯を確認すると、それはどうやら知らない

人からの着信のようだった。

しかしこのときまで、僕はこれほどまでに電話が無礼なものであるとは思っていなかった。その電話が鳴ったとき、僕は明日のテストのため勉強に集中していたのだから。

僕は正直、前触れなき着信を迷惑に感じたのだ。

だからこそ睨みつけるように携帯へ視線を向けるものの、出るつもりなどまるでなく、早く鳴り止むことを心のうちで命令してみた。

なぜか不思議なことに、その電話は長く鳴り響いた。まるで、さめざめと泣いているかのように。その電話はなかなか鳴り止まなかった。まるで深い闇の奥底から、必死に助けを求め続けているかのように。

やっとの思いでその着信がピタリと鳴り止んだとき、僕はこの携帯が死んでしまったのではないかとさえ思った。それと同時にやっとなんか自由になんか解放されたのだと安心することができた。その着信は、たった今鳴り響いていた電話は、僕だけを頼りに、僕だけにその声を届け、僕だけを必死に呼び続けているかのようにあつたのだから。

それは、ただ単に電話に出るといふジョンやその友人たちからの要求とは違い、僕にしがみついて、深く長く苦しい心の闇から、せめてあなただけでも私に気づいて助け出してほしいと望んでいるかのような、恐ろしく、そして心細い、悲痛な呼び声であるかのように感じられた。

それから僕は突然この携帯電話が怖くなって、明日のテストのことなどすっかり忘れて、あわてて床に就くのがあった。

五

あまりにも不安で相談したくてならなかったから、僕はとにかく、翌日の朝一番でジョンに昨日携帯電話が鳴ったことを告げることにした。

しかし、それをあっさりと後悔することになる。

「なぜ出なかつたんだ」

と責められたからだ。そのあとも続けて責めるように発せられる彼の言葉をさえぎるために、僕はジョンに先立って尋ね返した。

「本当にあの手紙を誰かに渡したのか？」

「お前の携帯が鳴ったのならそうだろう。だがな、ちゃんと電話には出るよ」

そんなことをジョンと言い合っていたときには、僕は勝手に手紙を出したジョン達が悪いとは思いながらも、どうしても罪悪感を抱かずにはいられなかつた。

「もしその電話が本当にあの電話なら、お前は求められているんじゃないか？」

たまたまそこに居合わせたマークがそのように言ったとき、僕はマークに言い返した。

「……いや、間違い電話さ。きっとかけまちがえたんだよ」

誰かが僕に、かけまちがえたとき。おそらく、それは単なる偶然に過ぎない。

「わかつたよ。でもさ、次はきつと電話に出るよ？ お前は誰かに求められているんだ。もしかしたら、心から」

ジョンとマークにこう言われて、自分でもそうしようと思った。

その次の日、知人のボブが僕のもとにやって来て、不機嫌そうにこう言った。

「これ、まさかお前か？」

その手には、あの手紙があつた。

「悪ふざけなら、やめたほうがいい」

「ああ、わかつているよ。もうしないさ」

僕の答えを聞くや否や、ボブは僕にその手紙を荒々しく手渡した。頭を下げながらその手紙を受け取ったとき、僕は思い出したようにボブに向かってこう尋ねる。

「ところで、これをどこで？」

怪訝な顔つきになったボブが言うことには、こつだ。
「家の郵便受けの中だ。お前さ、町中の家にそれを配るつもりか？」
その言葉を聞いた僕が、深く頭を抱えたことは言うまでもない。

六

おそらく、もはやなかったことにはできないらしい。
きつと僕は選択を迫られているのだろう。覚悟を決めて電話に出るか、電源を切って携帯をしまっておくかの二択である。

とはいえ、そのどちらも自分からは選べがたく感じられたので、僕は次の着信で決めようと思いついた。

つまり、次の電話の着信音が二十回以上鳴ったらその電話に出るということにしたのだ。確かに僕は電話に出るべきだとは思いつけど、一度でも出てしまったらその後も電話に出続けなければならず、おそらくその重責に耐えられないだろうという予感があつたのだ。

そう決意したはいいものの、予定もない僕には特に何もすることになかったのだ。僕は携帯を手に一日中家の中にいることにした。昼食を食べ終えると、退屈しのぎに僕は自分の将来についてゆくりと考えてみることにする。

たとえば、僕には明確な夢がない。けれど、それはあまり重要なことではないのかもしれない。むしろそれよりも重要なことは、自分が何をしたいかではなく、自分が何をすべきかを見つけることだと思っているのだ。

今自分の置かれていた状況を考慮に入れれば、それはとりあえず電話に出ることであるかもしれないけれど、それよりも自分にできる大切な、効果的な何かがあるように思えてならなかった。

これは以前僕がとある先生に言われたことであるけれど、まずは今の自分にできることをやっていくことが一番大切らしい。自分できないことはやろうとすると言われたようで、そのときの僕は少しだけ不満を感じたけれど、今ではそれが当然のことであるようにも感じられる。

俺は教師になる。そうジョンが明確に言ったのはつい最近のこと
で、それまでは漠然とした夢でしかなかったようだけど、彼の迷惑
なほどに他人に干渉する性格から判断すれば、もしかしたらそれも
向いているのかもしれない。

マークは社長になりたいらしい。とにかく何でもいいから人の上
に立ちたいと言っていた。あの自分勝手な性格からして、とうてい
平社員などにはなれないだろう。

その後も数人の知人らの将来の夢を考えて、最後に自分のことを
考えた。

とりあえず、とりあえず健康に長生きできればそれでいい。その
ための手段など、僕はなんでもよく思ってしまう。ただ、決して他
人を不幸にしてはならないだろう。

僕は少しでも人を幸せにできたらいいな、そのためにはまず……。
そのとき、傍らの携帯電話が鳴動した。

七

携帯から着信音が鳴り響く。

一回目。僕は緊張して自分の携帯のディスプレイを確認した。そ
れによると、どうやらまた知らない人からの着信であるらしい。

二回目。今回の着信音は前回のものとは違い、やけに静かに感じ
られる。まるで、何かしらの覚悟を決めているように。だから僕も
覚悟を決めて、携帯を静かに見詰めた。

三回目。なぜか突然、僕は今までの出来事が走馬灯のように浮か
んできた。それはあたかも、何かの死がもう直前にまで迫っている
かのようなだった。

四回目。理由もなく、僕には目の前の携帯電話が泣いているかの
ように感じられた。その涙は、汗となり、やがて僕の全身に流れた。
とても冷たい。

五回目。このとき僕には、ある確信が生じた。きっとこの電話の
主は、同じ人に違いない。この前僕に電話をかけてきた、あの人だ。

六回目。落ち着いて指を折って数えていないと、着信音の回数を忘れてしまいそうだった。それほどまでに僕は動揺していた。

七回目。いつの間にか、僕は携帯に縛り付けられていた。そして、はつきりと見つめられていた。電話の音が、もはや音として聞こえなくなっていた。

八回目。その声は、確実に僕に向けられていた。もし僕が出なければ、その声の主は一体どうなってしまうのだろうか？

九回目。これは、決して悪ふざけではない。心底から、全身を震わせ、声を限りに、僕のことを呼んでいる。これはきつと、悠長に二十回も着信音が鳴るのを待っているべきではない。十回だ。いや、もう今すぐにも出るべきだ。

……すると十回目の着信音の途中、その電話は切れてしまった。その瞬間、すぐに僕は取り返しのつかないことをやってしまったのだと後悔した。

なぜならその切れ方が、諦観そのものであったからだ。おそらく今すぐ電話をかけなおしても、相手はもう出ない。そのあきらめが、電話に対してだけではなかったからだ。それは、すべてへの、どうしようもないやりきれなさからくる、悲しいあきらめであった。

僕はどうやって出るべきだったのだ。

その日、死んだように黙り込んでしまった携帯を見て、僕は誓った。次こそは出ると。

翌日、待ち望んでいたように、机の上の携帯が鳴った。その着信音を耳にすると、僕は何かを取り戻すかのように急いで電話に出た。「もしもし、警察ですが」

その言葉から始まった電話は、困惑する僕にこんな事実を伝えてきた。

八

要約すれば、次のようである。

とある女性の携帯に、僕の携帯へかけられた履歴が二件残ってい

た。そして、その女性は二度目の電話の直後に自殺してしまったそうである。

その女性の自宅を調べたところ、遺書らしいノートが見つかったのだが、どうやらそこに僕のことを書かれていたらしい。そのため、僕に確認の電話をしたようだった。

その自殺の一件は驚くほどの速さで町内中に広まった。しかし、どうも女性の遺書のことだけは誰にも知られていないようだった。

友人達は、まるで他人事のようにその自殺について騒ぎ合っていた。今まで深く意識したことのない人間の死について、身近な場所で衝撃的に事件が生じたことによって、世界の実態をたたきつけられたかのように恐れてもいた。

僕はそのことについて黙っていればよかったのかもしれない。しかし運悪く、僕が事情を説明するために警察署へ行った姿を、誰かに目撃されてしまったらしい。

それから、僕に関するよからぬうわさが絶えなくなった。だから僕は自分で真実を伝えなければならぬと思った。

僕はただ、電話に出なかつただけだと。

当然ながら、この言い訳は多くの非難を受けた。見下された。それから、僕はみんなに避けられるようになった。

僕はもしかしたら、ジョンとマークも同じように後悔しているかもしれないと思った。けれど、今回はその出来事が僕達にとってあまりにも大きすぎたので、どう責任を取ってよいのか全く見当がつかなかった。

マークに会ったとき、彼は僕の姿を見るや否や逃げ出した。おそらく彼には、まだ現実を受け入れる決心がついていないのだろう。ジョンもまた、学校を休み続けた。

それからしばらくして、僕にその女性の遺書を読む機会が与えられた。それは一見日記のようでもあった。いや、最初は日記のようなくもりで書き始めたのだろう。日付こそないものの、最初のころは死を感じさせるものではなかつた。むしろ、何とかして希望を得

ようとしているようだったのだから。……あの日までは。
ノートのページ目、それはこう書き出してあった。

九

どうしてこんなにもだめなのかな？

最近、そんなことをよく考えてしまいます。教師になるという夢が、なんだかどんどん遠くに行ってしまうような気がします。だって、もう私は高校二年生なのに、ぜんぜん勉強ができないんだもの。親に怒られて、友達に笑われて、なんだかとても悲しい。

でも、がんばらなくちゃ。あきらめずに、努力をしなきゃ。

あんまり毎日が悲しいものだから、自分を励ますつもりでこのノートを書き始めました。だけど、だんだんこのノートが愚痴や小言で多くなったらどうしよう……。……。

そうならないためにも、なんとかがんばります。

今日、学校で先日のテスト結果が返ってきました。もう散々なもので、親に見せたらものすごく怒られました。両親はどちらもとても頭が良かったので、私のような馬鹿を見ているといらいらしてしまふようです。もしもこのまま成績が悪くならなければ、もう学費は払わないと言われました。

つまり、このままの状況が続くのなら、自分で働いて学費を払うか、高校を辞めるかのどちらかを選ぶと言つのです。頭の良い両親にとってそれは簡単な条件で、成績が悪くならないように勉強をすればいいだけじゃないかと笑います。そこで私が両親に、世の中にはどんなに勉強をしてもなかなかうまくいかない人もいるんだよと言つても、お前は努力が足りないだけだと言つて私を叩きました。

しかたがないので、明日からさらに勉強時間を増やそうと思いません。

今日、私の所属する部活の試合がありました。私も試合に出るこ

とが前から決まっていたんですが、勉強をするために早く帰るようになってから、あまり真剣に練習ができていませんでした。それでも試合に出してくれた監督には本当に感謝しています。

けれど、私の失敗で残念ながらチームは負けました。みんなには恨まれた上に、最初はとても優しくかった監督も、最近お前が部活をサボっていたからだど、みんなの前で、身がすくむほどの大声で私を叱りつけました。

その通りだと思いつたので、私は部活をやめました。

もう、勉強以外には学校でやるべきことが無くなったように感じられました。

私は最近よく学校で疎外感を感じます。それでもこんな私にもたった一人だけですが、大切な親友がいます。

この前、そんな私の親友が、私には何も言わずに学校を辞めてしまいました。これはあとで風の噂に聞いたことなのですが、彼女はバイトで知り合った彼氏と一緒に暮らし始めたそうです。悲しいことに、クラスで最後にこのことを知ったのは私でした。

結局彼女にとっての私は親友などではなく、何事にも反抗しない従順な、単に都合の良いだけの存在だったらしいのです。

部活も友人も無くなった私は、ただ勉強だけに打ち込みました。それでもなかなか思うように成績は上がらず、親との心の溝はどんどん深くなっていきました。そしてなんだかやる気がなくなっ、すべてがどうしてもよく思えてきました。

進路相談のとき、担任の先生にお前はそのままでは絶対に第一志望が無理だと断言されました。お前でも確実にいける進路先に進めと、はつきり言われてしまいました。ですがその進路先には、私の目指す夢は何もありませんでした。

最近になると学校でもぼんやりすることが多くなり、私はよく人に注意されました。ですが、最近は舌打ちだけになりました。

今日、もしも何も特別なことがなかったら、私は学校を辞めようと思いました。けどもちろん、学校ではいつもどおり何も変わったことなどありませんでした。

ですが、学校が終わって家に帰ると、家の郵便受けに一通の手紙が入っているのを見つけました。私はそれを、ほとんど無意識のまま手に取っていました。

悩んでいるなら、電話ください。

そんな手紙を私は初めて読みました。だからこれはきつと天からの贈り物なのだろうと考えたのです。そこでその手紙に書いてあるとおり、すぐに電話をかけてみようと思いました。それなのに、そこでなぜだか急に手が止まりました。

……怖かったです。みんなに見放された私が助けを求めようとしている相手が、本当に存在するのかどうか。

もしかしたら単なるいたずらかもしれない。いや、自分の幻想に過ぎないのかもしれない。さびしいほどにおそろしくて、結局その日はそのまま寝てしまいました。

その翌日、学校で悲しいことがありました。ある活動での班決めの際、とうとう私は一人になってしまったのです。どうしてよいのかわからずしばらく小さくなっていると、そんな私を見つけた先生が近づいてきて、どうして一人でいるんだと叱りました。そして適当に私をある班に無理やり入れました。もちろん、私はその班の中でずっと無視され続けました。

その日の夜、私はなんだか急に悲しくなって、例の手紙をじっと見つめていました。そして、その手紙に書いてあるとおり、どうしても誰かの助けがほしくてとうとう電話をかけてしまいました。

薄暗い部屋の中で、小刻みに震える右手で携帯を持っていて、もう私はこの電話の向こうにいる人に頼るしかないんだという気がして、悲しいほどに涙がこぼれました。

それから、何度も何度も呼び出し音が鳴りました。そのたびに私は涙がこぼれました。ですが、私の呼びかけには誰も出ないことが、本当に誰も出ないことがわかりました。やっぱり私は、誰にも相手にされていないんだと教えられました。

一体どれだけ泣いていたのでしょうか。私は自分の所有する携帯が、私と同じように誰ともつながっていないんだと思い知りました。きつとこの携帯も、こんな私と同じように、とてもつらいのです。

そんなことを考えていると、私は私の携帯に対して心から申し訳なく思いました。こんな孤独な私があなたの所有者で、本当にごめんなさい。あなたの電波は、もう誰にも届かないの。おそらく、ただ私のせいで。

力なく携帯をしまつてから再び手紙を見直すと、その文面の最後には、幸せを望む者よりと書いてありました。きつとこの人にとつては、今の電話に出ないことがきつと幸せなのでしょう。私と会話をすると不幸になってしまつと、相手はわかつていたに違いありません。

私にはもう、本当にどうしようもありませんでした。

それから数日間、日常は私のある決断を後押しするためだけに過ぎていきました。驚くべきことに、私にそれをためらわせるような出来事は何一つ起きなかつたのです。

私は今でもこの決断を、明確に文字として書き記すことをためらっています。ですが、あえてはつきり書こうと思います。その決断は、死です。

もう誰にも相手にされないという事実は、私には他の何よりもつらいことでした。もちろん、だからといって安易に死を選ぶべきだとは決して思いません。しかし残念なことに、それ以外には私にできることが何も思い浮かばなくなつてしまつたのです。

私は誰も恨んでいません。ただ、自分が情けないだけなのです。いつ死ぬのかも、本当はいつでも良かったのです。それでも私が

それを決められない理由は、少しだけ、ほんの少しだけ、未だに助けてほしいという希望が残っているからなのでしょう。

そう考えると、私はまた泣きました。声を出して泣きました。本当に、誰かになんとか助けてほしいと思っただけです。このノートにこんなことを書いているのも、誰かに気づいてほしいからなのです。

私はみんなに相談しようと思いました。しかしみんなは、それをかまっていなかったための冗談だと思って、本気だとは受け止めてくれませんでした。

もう、後戻りはできなくなりました。それでも恐怖によって決心がつかない私に、ある思いが浮かびあがりました。

もう一度、電話を試みよう。それで助かるかもしれないし、ダメかもしれない。でも、少なくともどちらかの決断はできます。私には、生きていく意味があるのだろうか。

私は机の引き出しにしまいこんでいた例の手紙を取り出して、『幸せを願う者』という文字を見つめました。

私は、落ち着いて深呼吸をすると、この電話に私のすべてをかけることを決意しました。久しぶりに取り出した携帯は、まるで今の私のように気力がないのだと感じられました。

手紙を見ながら、そこに書かれている番号をゆっくりと押ししました。ため息をついて、その携帯を耳に当てました。

音が鳴るたびに、今までの人生が走馬灯のように浮かんできました。そして、私の左右の目から、あふれるように涙がこぼれました。すると、今まで死ぬしかないのだと思っていた気持ちに、明らかに変化がありました。

お願い、助けて。この小さな私の声が、電話を通して誰かに伝わってほしい、そう願いました。

その電話は、私にとって永遠にも近く鳴り続けたのです。どれだけ鳴っていたのかさえ私にはわからなかったのです。でも、気づい

たときにはもう携帯の電源が切れていました。それと同時に、私の人生も終わりだと思いました。

あんなに電話をかけていたのに、心の奥から助けを求めたのに……。

私は今でも迷っています。それは死ぬことについてではありません。今まで書いてきたこのノートをどうするかについてです。

私が死んだあと、誰かにこのノートを読んでほしい。けれど、なぜだかそれは卑怯な気もする。でも、おそらく私はどちらかを選んでいるのだと思います。

もしも、私がこのノートを残すことを選んでいたらなら、どうかお願いします。誰かこのノートを読んだ人が、みんなに伝えてください。

私の死は誰かのせいではありません。自分自身の決断です、と。

十

このノートを読み終えた僕は深く後悔するとともに、自責の念に苦しめられた。そしてどうしようもないほどの罪悪感が僕を満たしていくのを感じた。

僕に助けを求めながらも無視されたことによって、絶望の中で死を選んでいった彼女。僕は確かに彼女に何もしなかった。いや、何もしなかったのではない。彼女のことを知らなかったにしても、彼女を無視したことは避けようのない事実なのだ。

僕はあるとき、無視するという恐ろしい暴力を、脆弱な彼女に振るったのだ。自分は関係ないと、知らないのと、それだけで自分は何もしなくていいと、本気で思っていたのだ。

無視は暴力だ。無知も同様だ。自分で行動を起こさないのは卑怯だ。

僕はこうして彼女のことを知った以上、もはや自分だけが幸せに生き続けていいのだろうかと疑問に思う。いつの間にか自分も孤独

になっていたことを思い出したとき、あやうく彼女と同じ決断をしてしまいそうになった。

そうだ、電話をしよう。

そう思い立つと、僕は急いで家に帰り自分の携帯を探した。しかし、どこを探しても見当たらなかった。しかたなく僕は自宅の固定電話の前で、静かに立ち尽くした。

僕がメモを確認せずに覚えている電話番号は、ジョンたった一人だ。一番の友人であり、最初に携帯を持っていることを教えた相手。僕は頭の中にある彼の電話番号を、一つずつ、一つずつ、語りかけるように押した。

……彼は電話に出なかった。その結果に落胆した僕は深く悲しむと同時に、ある決意が生じた。それから自分の部屋に戻ると、滅茶苦茶に散らかっていたその部屋を、できる限りきれいに片付けることにした。

そのとき、ちょうど物陰に隠れこんでいた僕の携帯も見つかった。その携帯には、僕を非難するメールがいくつか届いていた。メールを送り返すべきか悩んだのだが、結局それらをすべて消去して、携帯をポケットに入れて家の外へ出た。

その際、親に向かっていつものようにいつてきますと挨拶をしたが、ちゃんと帰ってこいとは言われなかった。それはいつものことではあったが、今日に限ってはつらい。あまりにもつらくて涙が出てきてしまった。

僕は泣きながら、遠くへ遠くへと、自分の結末に都合のいい場所を探して歩いた。

十一

人生を悲観し絶望していた僕は今になり、自身の足で死の間際まで歩いてきたことによって、やっと自分の愚かさを実感することができた。

もしもこのまま死んだとしても、決して自分を正当化することな

どできない。おそらくこれは、つらい現実からただ逃げ出しているだけなのだから。

しかし、それでもいいじゃないか、と自分に言い聞かせる。もともと僕は誰にも、何事にもあまり近寄らず、ずっと遠くにいたような気がする。きっと単に僕はすべてを遠方から眺めていただけなのだ。

もしもあのとき、彼女からの二度の電話に親しみを持って出ていたのなら、どんなにか幸せだったことだろう。

そして誰もいない静かな絶景にたどり着き、とうとうこれで最後なのだと決意したとき、僕はどうしても自分の携帯を確認したくなかった。ポケットからそれを取り出して、ゆっくりと今までのことを思い出していると、急に彼女の気持ち理解できた。

最後に、最後にもう一度だけ電話を試してみよう。そして、電話に出てくれたら自分の悩みをすべて語ろう。もし出なかったのなら、そのときはそのまますべてを捨て去ろう。

僕は望ましい二つの結末を思い描きながら、僕がなれなかった幸せを願う者に、果たしてジョンがなれるかどうか、自分の人生をかけて試してみることにした。

そして僕は半ば泣きながら、小刻みに震える指で、最後の電話をかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8028t/>

かけまちがえたとき

2011年6月4日03時25分発行